

埼玉県退職校長会
大里支部会報

おとさと

第 49 号

(題字は支部長)
令和2年8月1日
発行者
新井 俊一

あいさつ

幻の県定期総会

―総会実施委員へ感謝を込めて―

支部長 新井 俊一



「歴史には、たら・ればはない」と言われているが、も

しも最初の予定通り、六月五日(金)に埼玉県退職校長会定期総会が「さくらめいと」で開催されていたとしたら、私はこんなあいさつをしていたらどうだろう。

まず冒頭の開会行事では、「にわかラグビーファンの総会代議員の皆様、ようこそラグビータウン熊谷へ。心より歓迎します。」

午後の関連行事アトラクションの部では、「いかがだったでしょうか。大人に混じって大活躍した小学生の姿は。ここ熊谷では、伝統文化がしっかりと次の世代に受け継がれていますね。アトラ

クションに児童が参加したのは、大里開催が初。もう一度、出演の方々に大きな拍手を。」

熊谷市教委学芸員山下祐樹さんの講演会は、「骨つばい金子兜太さんの俳句は、県北に住む人の生き方に通じるものが多かったですね。」

結びの懇親会では、「上品な味ではありませんが、噛めば噛むほど味がでる熊谷の料理をご堪能いただきたいながら、交流を深められ、総会の印象を忌憚なく大里の役員に伝えてください。大里の人間は、本音を聞きたいと申しております。」

そして、全ての行事が終了した総会実施委員の前では、この一年余りのご苦労に感謝しつつ、「まあ大里支部の実力はこんなもんですね!!」と、見栄を張り、ベとなる。

新年度も明け、心も新たにゴーサインを待っていた四月十日。県本部より「新型コロナウイルス感染拡大防止と会員の命と健康を守ることを第一にする。」との観点から、「県定期総会中止」の一報

が入り、今日に至っている。

「県総会が中止となつての気分は？」と問われれば、「ほっとしている」が総会実施委員の本音かもしれないが、総勢九十八名の皆さんが、「心を一つ」にして、「大里の底力」を発揮されたことに心から感謝申し上げたい。

そんな皆さんを私は大変誇りに思っている。(四月十一日脱稿)

大里支部総会 中止

本来なら総会の席で受章された皆様の榮譽を称えるべきところですが、今年度は総会が中止となりできませんでした。そこで、受章者から一言コメントをいただきました。

秋の叙勲 (瑞宝双光章)

熊谷東 塚本喜一郎様

- いま 自分から
- 間違えたら やりなおせ
- かつての限界は いつか通過点
- 昨日も今日も 小さな旅
- 若者は幻を見 老人は夢を見る

高齢者叙勲 (瑞宝双光章)

熊谷中央 茂木栄治様

私はこの度はからずも「瑞宝双

光章」という叙勲の栄に浴すことができ大変感激しております。これもひとえに諸先生方のお陰と感謝して居ります。今後ともご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

熊谷中央 里見昌夫様

皆様に応援いただいたお陰です。感謝しております。

今後皆様のお役に立てればと専心努力して参ります。有難うございました。

深谷南 吉野一男様

私は、九才で歯科医だった父を亡くし、以後、今日迄、長命で昨秋、曾孫に恵まれ、家事や地域の事に参加出来るのは幸せです。

沢山の方々のご厚情に厚く感謝し乍ら、余命を頑張つていきます。

寄居 深田忠雄様

七月の米寿誕生日の翌月一日付で、公務に長年従事したと、瑞宝双光章をいただきました。

種々お世話になった皆様方に深く感謝しつつ、恥ずかしながらもあと一寸、ご厄介になります。

随想

子育ての支援

熊谷東 内田 忠行

昼間仕事で保護者が家庭にいない児童に対し、授業の終了後に、家庭に代わる生活の場として、保護者の仕事と子育ての両立を支援するのが児童クラブである。

あやとりや折り紙、将棋にトランプ。校庭では鬼ごっこやドッチボール、サッカーになわとび。みんなで食べるおやつ時間は、特に楽しいひとときである。一日の生活が終わり、今日もひとりまたひとり保護者が迎えに来て帰り始める。あたりも暗くなり心細くなるのか。「ママがまだ来ない。」と不安そうに迎えを待つ。駐車場に車のライト。保護者の顔を見つけて跳んで行って抱きつく子。微笑ましいかぎりである。ほっとした子どもたちは、にこにこして帰りのあいさつをする。保護者のみなさんも我が子に会い安堵の表情を浮かべ、「お世話になりました。」と深々とあいさつをしてくれる。交わすあいさつで、心は癒され今日一日の無事に感謝をする。



七十名の児童の家庭は、母子家庭、父子家庭、夫婦共働きなど様々である。どの保護者も子どもを育てるために必死で働いている。しかし、子育てに悩んでる保護者も少なくはない。保護者とのコミュニケーションを大切にし、積極的に声かけをしている。

児童クラブへ勤めて二年、不器用な私もあやとりができるようになった。折り紙も子どもたちに教わりながら鶴以外の作品も折れるようになった。毎日、子どもたちにパワーをもらいながら楽しく過ごしている。

自然の恵み

熊谷中央 加藤 眞司

新型コロナウイルスの感染による非常事態宣言が発令され、小・中学校等は臨時休校を余儀なくされている。

孫は小学生一人と中学生一人の二人。密閉、密集、密接の三つの密を避ける生活に努める毎日。外出も控え、一緒に過ごす時間が増えている。変化のない生活が長く

なると飽きも来る。何とか三密を避けながら変化をつけたいと思っているが、なかなか難しい。

そんな時、電話が鳴った。姉が所有する里山で「わらび摘みをしてないか」との誘いである。小さい頃に遊び感覚でよく行ったわらび摘み。懐かしさもあり、誘いを快諾する。

里山に行ってみると、柔らかな新緑が目優しい。開放感を感じながら精一杯深呼吸し、爽やかな気分を味わった。

わらびもあちこちに顔を出している。夢中で手を動かし、わらび

を摘んでいると、近くで「ウグイス」の独特な鳴き声も聞こえてくる。小学生の孫が口を尖らせ、鳴き声をまねる。すると、ウグイスはだんだん近づいてくる。姿は見えないが確実に近くにいる。

不思議な感覚ではあったが、自然の恵みを里山で十分満喫できた。新型コロナウイルスによる感染の危険性を忘れることが一瞬でもできた。

あつという間にわらびが袋一杯になった。大きな収穫である。やっぱり「自然の恵み」は心地よい。



二年目にあたって

熊谷西 稲葉 俊昌

二年目の再任用を熊谷市立大麻生中学校でお世話になっております。「健康がすべてではないが、すべては健康でなければ始まらない。」この言葉を大切に、いただいた機会をかみしめながら勤務に励んでいます。

昨年度は、熊谷市教育振興基本計画「くまがやラグビー・オリパラプロジェクト」が二年目を迎え、市内四十五校が切磋琢磨して「学力日本一」を目指し成果を上げました。そして「四年に一度じゃない。一生に一度だ。」で始まったラグビーワールドカップ。九月二十四日、国旗と国歌を描いた団扇を手に「ロシア対サモア」戦を市内の全中学校で観戦し、胸躍る経験をいたしました。

いよいよオリンピックピックという矢先、新型コロナウイルス感染拡大防止で三月二日より臨時休業となりました。今年度は、静まりかえった学校とともに始まったので。紫陽花の花が色づき始めた五月二十五日、緊急事態宣言がようやく解除され、もうすぐ主役である生徒たちの声が学校に戻ってまいります。生徒の安全を最優先に

ゼロベースからの計画の見直しになります。結局最後に残るのは授業です。教師は授業で勝負する。三年生には、まさに一生に一度の中学生生活最後の年です。できることを大切に、残り十ヶ月でしっかりと学力をつけなければなりません。生徒にとつて、何がベターかを第一に取り組んでまいります。先輩の皆様からのご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

子育て支援に携わって

熊谷南 小林 晃一

昨年度まで二年間、熊谷市教育委員会社会教育課で子育て支援事業を担当し、保護者を対象に講話を行う機会をいただいた。

「熊谷の子どもたちは、これができるんです！『四つの実践』と『三減運動』をベースに、子供の発達段階における特徴や小学校・中学校での生活の様子にふれ、「笑顔」と「共感」をキーワードとして保護者に心得ておいてほしいことなどを話してきた。

はじめは、限られた時間の中で、伝えたい内容をいかに効率的に入れ込むかに重点を置いていた。しかし、途中から改善したこと

が二つあった。一つは、「グルーピングカウンター」の要素をできる限り取り入れたこと。参加者に少しでも主体性を持ってもらうとともに、保護者同士のネットワーキングのきっかけになればと考えた。

二つ目は、保護者に寄り添った話をする。家庭教育支援に関わる先輩の女性は、「お母さん、今までよく頑張ったね。これからは学校の先生と一緒に子供を育てるのよ。」と語りかけるのだと聞き、これまでの自分の話は、元校長からのお説教的に聞こえていたのではないかと思っただからだ。

参加者にとつては一度限りの講話であるが、子育ての不安が少しでも和らぎ、一層の愛情を持って子供たちに向き合ってもらえていたら幸いに思う。

時は、重ね折りし・・・

自然とともに

熊谷北 井田 照幸

「梅干せば

暇に母も

祖母も来る」

これは、亡き母が俳句会で詠んだ句である。温故知新の「よすが」としての一句でもある。

太平洋戦争の戦前・戦後を通して母は教員を経て、農林省に勤務していた父とともに、自然環境に包まれながら「農は国の基」、農業経営に勤しんできた。

私も教職を定年退職し、現在は父母の後を継いで地域の方々と機械化農業に努めている。父母の後ろ姿を思い浮かべ、改めて両親を尊敬するとともに感謝している。

時は、重ね折りし意義深いものである。

今から、五十五年前近くにもなるうか。小学生のころである。当時は、薄暗くなるまで校庭等で遊び、友だちと家路に向かう。当時は通学路に沿ってたくさんのお小な川（堀といったほうがいいかも・・・用水路）があった。そこには夕方になると、たくさんのお「ホタル」が飛び交っていた。今に思えば、幻想的で夢のようにすら感じられる。その自然の美しさは、こども心にとつても実に感動的であった。今でも脳裏に実感として鮮明に焼き付いている。現在は、趣味として、「街中ギャラリー」の仲間と撮影会を楽しんでいる。

昨今、新型コロナウイルス感染拡大防止対策が図られている。いのちの尊さを噛みしめる。

当たり前のように思っていた日常に感謝し、便利さ余って心を失うことのないよう、日々の暮らしを大事にしていきたい。

当たり前であること

深谷北 持田 和佳

退職後六年余り、旅行や趣味、孫の世話など平穏な毎日が続いていた。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大が始まった三月、学校から子どもの声が消えた。その後、長期に及ぶ休校や各種施設の閉鎖、休業などが実施され、当たり前であった日常生活が急変してしまった。

この状況が忘れかけていた「当たり前であること」の尊さを再び思い起こさせた。それは九年前の東日本大震災でのことである。東北各地の惨状に心を痛めながら、不便さの中でも何とか日常生活が送れ、卒業式や入学式、学習活動が実施できたときにわかった「当たり前であること」の尊さであった。今、マスクを着用して一定の距離を保ちつつ、言葉少なに行き交う人の姿が日常となってきた。人とのふれあいや会話が著しく減り、人の温もりを感じるものが損なわれてしまった。しかし半面、

会話の意義と貴重さ、人とのつながりの大切さ、学校から聞こえる子どもたちの声の心地よさ、「当たり前であること」の尊さなど平時には気づかなかったことを知る機会となった。

現在、緊急事態宣言が解除されて元の日常生活が次第に戻りつつある。平時には気づかなかったことを心に留め、平凡で当たり前の日々感謝しながら過ごしていきたい。

渋沢栄一翁 再発見

深谷中 清水 勉

写真道楽（道楽？）を自称しておりますが、深谷市教育委員会から『渋沢栄一 ところざし読本』表紙の依頼を受けたことをきっかけに、栄一翁関連の写真集を出版したいと考えました。栄一翁に詳しい河田重三先生にお声がけをして、写真＋文章のガイドブックを作成することにしました。

通常のカメラとドローンを使って、中の家、煉瓦工場、誠之堂、清風亭、諏訪神社、鹿島神社、尾高家、渋沢栄一記念館、内山峡など、様々な関連施設を撮影したものと、河田先生の説明文を足し併せて制作しています。

私事で恐縮で

すが、埼玉にも美しい自然が沢山あることを皆様にも知っていただきたく思い、『埼玉の美しい自然』という写真集を「さきたま出版会」から発刊させていただいた。いただいた経緯があり、今回も『渋沢栄一 ビジューアルガイドブック（仮称）』について「さきたま出版会」の星野和央会長様に相談しますと、運良く今年中に発刊できる運びとなりました。

王子にある渋沢資料館の井上潤館長様に監修をしていただき、河田先生のご案内で、撮影を都内まで広げますと、飛鳥山公園、東京駅、東京証券取引所、東京商工会議所、旧国立第一銀行跡、神宮外苑、常盤橋公園など、栄一翁が日本経済の発展に寄与した多大な足跡を再発見することができました。



また、養育院跡など社会貢献事業についても大きな功績を残していることも再発見できました。

疲れが抜けない一年生

深谷南 松本 浩

退職後、早一年が過ぎた。退職したら、旅行や好きなことをして、のんびり過ごしたいと期



待をしていたものだ。しかし、現実はそのころではなかった。親の介護、自治会の用事、家業である農業、そして生活費を稼ぐために私立大への就職と、慌ただしく過ごす羽目になった。

これでは、退職前と同じであるどころか、やることなすことすべてが初めてのことなので、まさに一年生である。期待に胸を膨らま

せて入学した一年生はピチピチと勢いがあるが、六十を過ぎたおじさんにはそんな勢いはない。あるとすれば疲れ、それもなかなか抜けない疲れだ。

それでも歩みを止めるわけにはいかない。米や野菜はどんどん成長していくので収穫しなければならぬ。季節ごとの自治会の行事も待ったなしだ。おまけに、新型

コロナウイルス

感染拡大防止の

ため、様々なことに中止や変更や配慮が生じた。色々な方々とうまくコミュニケーションをとること、事象に柔軟に対応する力の大切さを、今さらながら感じる日々である。

幸い、関係者に恵まれ、気持ちの疲れはない。このことは

最高にありがたい。また、農作物の収穫の喜びもさることながら、地域の方々

のねぎらいの言葉や学生の採用試験の合格の報告は、貢献できたという違った喜びを与えてくれる。

身体の疲労は抜けないが、うまくごまかしながら、二年目もドタバタと慌ただしく過ごそうと思う毎日である。

こんな時代だからこそ、

「花は無心に蝶を招く」学校生活を願う

寄居 神田 昌文

新型コロナウイルスの影響を受け、学校は三カ月間に渡る臨時休業に入っていたが、緊急事態宣言が解除され、六月からは、分散登校ながらも学校再開の運びとなった。

この緊急非常事態を予測していた人物がいる。イギリスの自然科学者「ダーウィン」である。格言『最も強い者が生き残るのではなく、最も賢い者が生き延びるのでもない。唯一生き残る事ができるのは変化できる者である。』は、世界中の誰もがその偉大さを噛み締めたのではないだろうか。

そして、今、私はステイアットホームから抜け出し、ステイアットホームセンターの生活を楽しんでる。雨上がりの朝、ジャガ芋畑の草むしりに精を出していると、

何処からともなく二匹の蝶が舞い降りて来て、仲睦まじく薄紫色の花の周りを戯れている。まさか一年前に見かけた蝶ではないと思うが、色艶、舞う姿は酷似している。「ジャガ芋の花開くとき、二羽の蝶舞い降り来る。」江戸時代中期の禅僧、良寛の漢詩『花と蝶』が思い起こされる。

花無心招蝶 蝶無心尋花

花開時蝶来 蝶来時花開

今年度も私の目の前には五人の初任者教員がいる。また、各学校では新たな生活様式への対応が喫緊の課題となっている。私はこんな時代だからこそ「花は無心に蝶を招く」、そんな当たり前の学校生活が初任者教員らにも舞い降りることを念じて止まない。

吾亦不知人 人亦不知吾
不知従帝則（無心に生きる）



新入会員の声

ようこそお願ひします

熊谷東 沼尻 慎一

今年度より退職校長会に入会させていただきます。よろしくお願ひいたします。引き続き、再任用校長として勤務しております。校長室の行事予定表は今のところほぼ白紙です。若しくは、赤で中止か延期の文字です。新たな課題満載の年ですが、これからもご指導のほどよろしくお願ひいたします。

感謝を胸に新たな出発

熊谷東 中村 朋子

多くの方々に支えられて、三十八年間の教職人生を全うできたことに、感謝の気持ちでいっぱいです。校長職においては、諸先輩方にご指導・ご支援をいただき、助けられ励まされました。大変心強かったです。ありがとうございます。四月より、熊谷市教委学校教育課に勤務しております。子供たちや先生方のために頑張りたいと思います。退職校長会の皆様、どうぞよろしくお願ひいたします。

学校再開を願って

熊谷東 木島 直樹

令和二年三月から新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、臨時休校が続いている。気持ちが晴れないまま、臨時休校も五月で三ヶ月目となってしまった。

退職後、四月から奈良小で再任用教諭として勤務を始めた。子供の声が聞こえない学校は寂しいものである。今は、コロナ終息を願ってがまんの時である。学校再開の日を待ち、微力ではあるが力を尽くしたい。

夢の舞台へ

熊谷東 長谷川 雄一

三十六年間の在職中は、皆様にたいへんお世話になり、誠にありがとうございました。心から感謝を申しあげます。

さて、私事で恐縮ですが、次年度から文部科学省の在外教育施設シニア派遣が決まりました。教職の最終目標として目指した舞台に、ようやく立つことができます。微力ではありますが、夢の舞台で、日本人学校の学校経営に全力で取り組みんでまいります。

平凡、でも充実

熊谷西 笠原 正志

ほぼ日の出で起床。お湯を沸かす。ウエットシートでフローリングを清掃。緑茶を一服。分別ごみ出し。ラジオ体操第一。スクワット。腕立て伏せ。朝食。出勤。週四日勤務。(初任者拠点校指導教員)帰宅。【週三日は、仙元山散策。階段あり、斜面ありで足腰の衰え防止】夕食。つまみをおかずにお茶碗に少しの白飯。そろそろ睡眠。口腔衛生を心がけ、明日の平凡のために就寝。退職後の充実です。

出会った方々に感謝

熊谷西 笠原 健司

おかげ様で、三月三十一日に、無事定年退職することができました。これもひとえに、諸先輩方や同僚、地域の方、保護者と子供たち、そして、家族の協力のおかげと感謝しております。

四月から、少し時間のゆとりができましたので、二つのことにチャレンジしています。一つ目は、旬の野菜作りをすること。二つ目は、我が家の庭を雑草園にしないこと。健康第一で精進しています。

笑顔

熊谷北 原口 政明

中学校在任中は、大変お世話になりました。引き続き、ご指導よろしくお願ひいたします。

現在、大学で幼児教育に携わらせていただき、ふれあいの大切さを実感しています。乳幼児とのふれあいには、スキンシップ、言葉によるふれあい、そして、リズムによるふれあいが欠かせません。笑顔がこぼれます。これからも、ふれあいと笑顔あふれる教育が展開されることを願っています。

お世話になります

深谷北 飯田 明

この三月、定年退職し、新会員としてお仲間に加えていただきました飯田です。四月からは再任用の初任者指導教員として、藤沢中学校を拠点に、幡羅中学校、豊里中学校、川本中学校で五名の初任者を指導しています。今は大変な状況ですが、平穏な日々が必ず訪れます。

今年度から新会員になった退職校長会の一員として、頑張つてまいります。ご指導ご鞭撻の程よろしくお願ひ申し上げます。

「これまで」と「これから」

深谷中 斉藤 実

三十六年間の教職生活「これまで」を振り返ると、やり通した喜びや重責から解放された安心感、「もつとできたのでは」という後悔の気持ち、そして、多くの方への感謝の気持ちでいっぱいです。「これから」は、幼稚園教育に心新たに携わる一方で、好きな本を取り取り、畑いじりをし、史跡巡りをするなど、自分の時間を大切にしたいと思えます。どうぞよろしくお願いいたします。

リスタート

深谷中 山田 明

新型コロナウイルス対応で慌ただしく最後の年度末を終え、四月から弘済会の参事としてリスタートすることとなった。

ところが、ステイホームの日々を過ごしている。何年経っても、今年の出来事は忘れることがない人生のページとなるだろう。

これからは、なお一層心身の健康に気を付けていこう。

まだまだ日々勉強です

寄居 保泉 清之

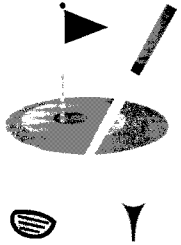
「寄居・大里に勤務を」と願っていたのですが、思いかかわらず定年を迎えました。

現在、再任用教諭として鶴ヶ島市内五校の小・中学校にて、初任者と教育活動に取り組んでおります。今までの経験が生かされると考えていましたが、学ぶことも多く、苦戦しております。退職校長会の諸先輩方には、ご指導の程、よろしくお願いいたします。

第十七回 春季ゴルフ大会

前回に続き大会が中止になってしまいました。今はただ一日も早く元の生活に戻れることを願うしかありません。そして、また皆様と楽しくプレーできることを心より願っております。

文責 島崎一雄



地区だより

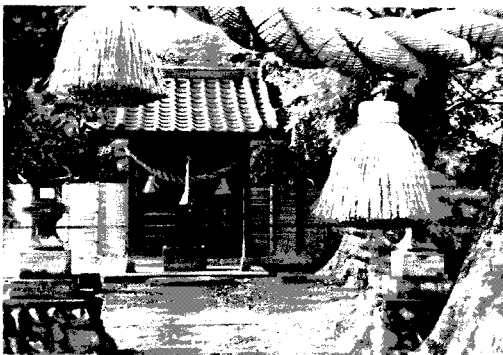
鎌倉武士「榛沢六郎成清」

深谷中 小暮 利明

「今日はナリキヨ様のお祭りだ」寒風の中、放課後誘い合ってお参りしたものである。

榛沢六郎成清は畠山重忠の家臣武蔵七党の丹党に属した鎌倉武士である。源頼朝の平家打倒の折、重忠と共に参加、頼朝に拜謁し、以後源氏に所属した。成清三十七歳、働き盛り、その堂々たる容儀に、頼朝が「垂父成清」（父に次ぐものの意）と呼んだという逸話がある。文治五年（一一八九年）奥州藤原氏征伐には人夫八十人を使い一夜のうちに敵方の堀を埋め、突撃した。これを機に藤原泰衡は退却したと「吾妻鏡」に記されている。また建久元年（一一九〇年）九月、頼朝の命により、鷺宮神社の再建造営奉行に任ぜられた。今ではアニメの聖地として人気を集めているが、当社古記録に「御本社神前社再建久元年九月大將軍源頼朝公奉行榛

沢六郎成清弊殿」（埼玉叢書）とある。建久二年、北条時政の後妻牧の方の讒言により、重忠・成清に謀反ありとして、二俣河原（横浜市）にて、三万余の大軍に囲まれ討ち死にした。遺骨は家来が持ち帰り、成清館跡（後榛沢）に葬られた。江戸期に「奉造立石塔為成清菩提也・享保八年卯年」と刻まれた供養塔が在り、県は昭和三十八年旧跡に指定。境内に五輪塔と遺跡保存会の顕彰碑文がある。毎年二月六日、神主・地域役員により祭祀が引き継がれている。今は、祭りに子どもの姿はなく、櫂の大木が静かに見守るのみである。



榛沢成清 館跡



俳句

亡き父を偲んで

熊谷南 原口 一明

靖国の花の便りに暗き父

秋の日にアルバム燃やす父の顔

季節の移り変わりを楽しんで

ふと見ると窓いつぱいに花吹雪

梅雨の夜鳴き声さびしホトトギス

初雪に心はずでに窓の外



老いの虚言

熊谷中央 角田 茂男

疲れまず洒落の通じぬ石アタマ

サボリ屋は権利の行使手を抜かず

老いた顔それは履歴書通信簿

心配だ読まぬ書かぬが教えてる

行間にそっと忍ばず淡き夢

短歌

秋を待つ

熊谷北 荻野 俊行

五六月会議は中止の報届く

三密を断ち野良着の日々哉

茄子胡瓜苗は日毎に成長し

夏よびて今日花をつけたり

今日は花明日は実をつけ願わくは

コロナ禍去りしお日待ちの頃

コロナの春

深谷北 高松 明子

コロナ無き去年の賑わい懐しむ

「オープンガーデン」にバラ咲き満ちて

コロナ禍に静まる学校を見て想う

教室の賑わい子らの笑顔

陽に透ける若葉の森に野鳥の声

聞きたしと思う「ステイホーム」の日に

コロナ禍

寄居 吉田 壽美子

賜りし朱のガーベラを

クリスタルに挿して眺む朝のひとつき

朝夕な植えし野菜を見届ける
瓜蠅探す葉の表裏に

コロナ禍に芍薬卯木盛り咲く

この一瞬の様を描きたし

幻の県退職校長会定期総会

事務局長 大岡 由男

「埼玉県退職校長会定期総会」が大勢の会員の出席のもと、熊谷文化創造館さくらめいとで盛会の内に実施され・・・と報告する予定でありました。

しかしながら、新型コロナウイルスの感染拡大により「緊急事態宣言」が発令され、中止の止むなきに至りました。誠に残念の極みであります。

二年前から新井俊一会長を中心にして実施委員会を組織し、準備してまいりました。大里地区の組織力を発揮するよき機会でありましたが、仕方ありません。今日まで、円滑な開催に向けての会員の皆様のご支援ご協力に感謝いたします。

絵画説明

本四十九号を飾る三枚の水墨画は、水墨画同好会長、篠崎忠男先生の作品です。

編集後記

例年と異なる原稿依頼や会場確保、そして「新たな生活様式」のもとで編集委員会が開かれました。皆様の原稿からも「COVID-19」の影響の大きさを実感しました。

また、平成八年の創刊号から第四十八号まで二十五年間お世話になった光陽社さんが閉社され、本支部長が直接感謝状をお届けしました。第四十九号からは博文社さんに引き継がれます。



支部長より感謝状の贈呈

令和2年度 広報員	弘子 明史 明裕 三章 一昭 眞雅 裕一 重 誠寛 田藤 林 山口 島田 本澤 岡 内遠 小瀧 原福 河松 大室
--------------	-------------------------------------------------------------------

埼玉県退職校長会大里支部会報 (第四十九号)

発行 令和二年八月一日
発行者 支部長 新井 俊一
印刷所 株式会社 博文社
熊谷市本石一―一三四
〇四八(五二)三〇六三